体重変動幅過多な女子短大生の心理的特性

——P-F Study（青年用）を用いて——

石　田　妙　美

Psychological Characteristics of Women's Junior College Students in Fluctuating Weight Condition

Using A Psychological Test of Rosenzweig P-F Study (Adolescent Form)

Taemi Ishida

1．はじめに

近年若い女性の痩せ志向は一般的になってきた。ダイエット産業が拡大し，若い女性を対象とする雑誌などでの宣伝が増加している。また最近では，思春期，青年期の摂食障害が増加し，社会問題化している。

摂食障害は，その人の社会的環境や成長過程での自己確立のつまづき，幼児期からの母子関係に起因することが多いが，摂食障害を早期に発見し適切に対応することが，予後を良好なものにする上で望まれる。[1)2)] つまり，むちゃ食い，食事制限，絶食などの摂食行動異常や自己の身体イメージの偏見，無月経，体重減少などの症状[3)]を出来るだけ早期に発見することが必要である。

一方，痩せは脱力，無力感，無月経，皮膚乾燥，貧血，思考力減退，ストレスに対する抵抗性の低下を合併し，[4)] また無月経は，5～10kgの体重減少で起こすという報告[5)]がある。体重減少の原因は様々であるが，女子学生の場合は疾病ではなく，やせ願望による摂食行動の変化によるものが多いと思われる。

また極端な体重変動には，なんらかの心理的特性が存在すると推測される。そこで体重変動がもたらす心理的特性を明らかにするために，今回 P-F Study（青年用）を実施し，その結果を反応評点カテゴリー別，反応評点因子別，超自我因子別および場面別評点因子出現率の傾向，反応転移の方向と出現率について検討したので報告する。

2．方　　法

(1) 被 験 者

被験者は，本学の1992年度２年次生1,015名中，１年間の体重変動が比較的大きかったもの（±3.5kg以上の体重変化があったもの）およびP-F Study 検査を希望した146名のうち，以下の58名である。

1991年４月と1992年４月に実施した健康診断の結果から，１年間の体重変化量を算出し，本学２年次生976名の体重変化の標準偏差（2.63）の約２倍にあたる５kgを基準にした。次に体重が５kg以上減少したもの，５kg以上体重が増加したものと，１年間の体重変化が±１kg以内のものとに分けた。（２年次生の１年間の体重変化量の平均は，0.61kgであった。）体重変動－５kg以上群は11名，＋５kg以上群は18名，±１kg以内群は29名である。表１に，体重変動別被験者の体型と１年間の変化量および±１kg以内群との比較を示した。

表１　体重変動別被験者の体型

＊＊　：P＜0.01
＊＊＊：P＜0.001

	±１kg n＝29		－５kg以上 n＝11		F		＋５kg以上 n＝18		F	
	平　均	SD	平　均	SD			平　均	SD		
前年身長	158.3	4.97	157.2	4.44	0.85		158.9	6.57	1.79	
前年体重	53.7	6.98	60.8	6.85	1.02	＊＊	55.5	7.43	1.16	
前年 BMI	21.38	2.28	24.62	3.03	1.88	＊＊	21.95	2.46	1.19	
今年身長	158.6	5.07	157.2	4.51	0.84		159.1	6.68	1.77	
今年体重	53.7	6.95	53.7	7.77	1.32		62.48	7.21	1.10	＊＊＊
今年 BMI	21.32	2.26	21.78	3.38	2.38		24.65	2.38	1.13	＊＊＊
身長変化	0.22	0.58	0	0.57	1.03		0.17	0.59	1.06	
体重変化	0	0.5	-7.03	1.71	12.42	＊＊＊	6.94	2.02	16.69	＊＊＊
BMI 変化	-0.05	0.24	-2.83	0.73	9.83	＊＊＊	2.69	0.84	12.52	＊＊＊

SD：標準偏差　F：分散分析

(2) 手 続 き

被験者の希望する検査日時を決定し，予約制で３～８名ずつの集団法でP-F Study（青年用）を実施した。「P-F Study 解説－1987年版－」の『評点法』および『青年用各場面評点上の注意事項』に留意して各反応語を評点し，反応評点因子別，反応評点カテゴリー別，超自我因子別及び各場面の評点因子出現率，反応転移の方向と出現率の集計を行った。

次に，これらを基礎資料として，体重変動別に反応評点因子別の平均と標準偏差，反応評点カテゴリー別の平均と標準偏差，超自我因子別の平均と標準偏差，反応転移の方向と出現率の平均と標準偏差を算出した。

これらの結果を，各反応評点カテゴリー，各反応評点因子及び超自我因子ごとに分散分析（F検定）とt検定を行った。また，各場面の評点因子出現率，反応転移の方向と出現率については，カイ二乗検定を行った。

3．結果と考察

被験者の1年間の体重変動が±1㎏以内群と－5㎏以上群の体型を比較すると，前年の体重とBMI（Body mass Index）[注1)]が危険率1％で有意であり，－5㎏以上群が前年度の体重が平均7.1㎏大きかった。また，＋5㎏以上群と±1㎏以内群とでは，今年の体重とBMIが危険率0.1％で有意差があった。すなわち平均8.78㎏±1㎏以内群より体重が大きかった。

(1) 反応評点カテゴリー

表2に，体重変動±1㎏以内群と，－5㎏以上群及び＋5㎏以上群の反応評点カテゴリー別の平均（％），標準偏差とF（分散分析）を示した。

体重変動±1㎏以内群と－5㎏以上群を比較すると，アグレッションの方向は，I－A（自責的）が危険率5％で有意であり，－5㎏以上群の方が高かった。E－A（他責的）とM－A（無責的）は，体重変動±1㎏以内群と，－5㎏以上群及び＋5㎏以上群との間に有意な差は認められなかった。

アグレッションの型では，E－D（自我防衛型）が，体重変動±1㎏以内群と－5㎏以上群を比較すると危険率5％で有意であり，－5㎏以上群の方が低かった。O－D（障害優位型）とN－P（要求固執型）は，±1㎏以内群と，－5㎏以上群及び＋5㎏以上群との間に有意な差は認められなかった。

GCR（集団順応度）は，－5㎏以上群が±1㎏以内群に比べて危険率5％で有意であり，－5㎏以上群の方が低かった。±1㎏以内群と＋5㎏以上群との間には，有意な差は認められなかった。また－5㎏以上群と＋5㎏以上群との間では，アグレッションの方向及び型，GCRともに有意な差は認められなかった。

したがって，体重変動－5㎏以上群は±1㎏以内群に比べI－Aが高いので，欲求不満の原因を自分の責任に帰し，後悔と罪の意識を抱きやすく，自責傾向が強い[4)]が，E－Dが低いので，ストレス解消のために率直に反応することが少ない。またGCRが低く，日常遭遇しやすい欲求不満場面では，世間の常識となっているような方法で適応する，いわゆる社会的適応性が少ないといえる。

表2　反応評点カテゴリー別平均とSD（±1kgと±5kg）

＊：P＜0.05

		E－A	I－A	M－A	O－D	E－D	N－P	GCR
±1kg n＝29	平均%	41.1	29.7	29.0	29.1	47.9	23.1	61.7
	SD	8.4	4.8	6.9	6.3	5.2	6.2	10.6
	RANGE	25.0~56.0	21.0~42.0	19.0~44.0	13.0~38.0	38.0~61.0	8.0~35.0	42.3~88.5
－5kg以上 n＝11	平均%	35.2	34.6	30.3	31.5	43.3	25.7	52.8
	SD	8.3	6.2	7.0	7.3	5.6	8.3	12.6
	RANGE	21.0~48.0	23.0~44.0	15.0~40.0	19.0~44.0	35.0~52.0	10.0~40.0	38.5~80.8
F		1.04	1.73	1.09	1.44	1.21	1.93	1.51
			＊			＊		＊
＋5kg以上 n＝18	平均%	38.1	31.5	29.6	33.3	44.8	22.3	57.7
	SD	8.2	6.8	8.5	12.3	8.7	9.3	10.4
	RANGE	19.0~50.0	17.0~46.0	17.0~46.0	15.0~65.0	22.0~56.0	2.0~38.0	45.8~76.9
F		0.97	2.02	1.57	3.92	2.86	2.33	0.98

減量を持続させるにはかなり減量への強い意思が必要である。たいていは途中で挫折し，減量を試みても以前の体重に戻ってしまうものである。1年間に5kg以上減量した背景には，体重や食事制限に対する強迫的観念の存在が推測されるが，I－Aの高値はこれを裏付けるものと考えられる。

E－Dは自我の強調に関係すると報告されており，[6)7)] これが低い－5kg以上群は，自分自身に対する自信が少ないと思われる。摂食障害の一つであるアノレキシア（神経性無食欲症）の前段階にあるものの特性の1つに，長期にわたる低い自己評価がある[8)]が，1年間に5kg以上体重減少を実行させる原動力であろう「やせ願望」は，自分自身に対する自信のなさによるものではないかと推測される。

また－5kg以上群が，自責傾向が強いにもかかわらず自我防衛が低いという状態を示したことは，緊張状態を生み出し，短期間に大幅な減量をすることはかなりのストレスとなると考えられる。

GCRは校種（中・高・大）の進行にともない漸増傾向がある。[9)] 中学生女子の標準GCR平均は53.8%，大学生女子となると平均60.2%である。[6)] これらの値と比較すると，－5kg以上群のGCR平均は52.8%と中学生女子の値に相当し，社会的適応性が発達課題として未解決なのではないかと思われる。

低い自己評価，深刻な不安全感，良い子，素直，聞き分けのいい子，未熟なパーソナリティー

などアノレキシアの前段階にあるものの特性[8]や，従順，気を遣う，優等生，強迫的などのアノレキシアの性格[1)10)]は，1年間で5㎏以上体重減少した群の特徴と類似しており，1年間で5㎏以上の体重減少はアノレキシア早期発見の目安になりうると思われる。

(2) 反応評点因子

表3は，体重変動±1㎏以内群と，－5㎏以上群及び＋5㎏以上群の反応評点因子の頻数の平均と標準偏差およびF（分散分析）を示したものである。I′（自責逡巡反応）は，－5㎏以上群が±1㎏以内群よりも危険率5％で有意であり，－5㎏以上群の方が多かった。M′（無責逡巡反応）は－5㎏以上群と＋5㎏以上群が±1㎏以内群よりも危険率5％で有意差があり，±1㎏以内群が少なかった。

また－5㎏以上群と＋5㎏以上群を比較したが，有意差は認められなかった。

表3 反応評点因子別 平均（頻数）とSD（±1㎏と±5㎏）

＊：P＜0.05

		評点因子								
		E′	E	e	I′	I	i	M′	M	m
±1㎏ n＝29	平均	4.3	3.9	1.7	1.9	3.5	1.7	0.9	4.0	2.1
	SD	1.3	1.7	1.0	0.9	1.0	0.7	0.6	1.1	0.9
	RANGE	1.5~7.5	1.0~7.5	0.0~4.0	0.5~3.5	1.0~6.5	0.5~3.0	0.0~2.0	2.0~6.0	0.5~4.5
－5㎏以上 n＝11	平均	3.4	3.5	1.6	2.7	3.6	2.0	1.5	3.2	2.5
	SD	1.4	1.9	0.7	1.1	0.8	1.1	1.1	1.3	1.2
	RANGE	1.0~5.5	1.0~7.0	0.0~2.5	1.0~5.0	2.5~5.5	0.0~4.0	0.0~3.0	0.5~5.0	0.5~5.5
F		1.21	1.32	0.52	1.64	0.64	2.59	2.81	1.59	1.96
					＊			＊		
＋5㎏以上 n＝18	平均	4.4	3.6	1.3	2.2	3.6	1.8	1.4	3.5	2.3
	SD	2.0	2.1	1.2	1.2	1.6	1.2	0.7	1.3	1.3
	RANGE	2.0~9.0	0.0~6.5	0.0~4.5	1.0~6.5	1.0~6.0	0.0~4.5	0.5~2.5	1.5~6.5	0.0~5.0
F		2.40	1.50	1.44	2.09	2.43	2.80	1.22	1.44	2.08
								＊		

すなわち－5㎏以上群は，±1㎏以内群に比べて，不満をあえて表明しない反応（I′）や失望や不満の表明を最少限にする反応（M′）が多く，更に有意差は認められなかったものの，失望や不満を外に向ける反応（E′）と誰にも罪はないととらえる反応（M）が少ない傾向がみられた。

I′の値が高い人は，失望や不満を外に出さないが，心の中では不満を抱き自分自身にその原因を求める。また心中の不満や失望を他人に知られたくないと思っている，いわゆる不満感情を否定する傾向が強い人である[6]。またM′は，失望や不満を抱いても，攻撃や自己主張をさける反応である。－5㎏以上群は，ヒトの生理的欲求である食欲を押さえて減食・減量し，しかも自ら望んで自分の意思で実行したと憶測される。この葛藤がI′とM′の結果に表れているのではないかと考えられる。

また－5㎏以上群のI－Aの値が高いのは，I′が高いことによるものであることが明らかになった。

(3) 超自我因子

体重変動±1㎏以内群と，－5㎏以上群及び＋5㎏以上群の超自我因子別の平均（%）と標準偏差及びFを表4に示した。±1㎏以内群と－5㎏以上群との間には有意差は認められなかったが，＋5㎏以上群は，±1㎏以内群よりもEとE＋Iが危険率5%で小さかった。また－5㎏以上群と＋5㎏以上群の両群間には，有意な差は認められなかった。

表4　超自我因子別　平均とSD（±1㎏と±5㎏）

＊：P＜0.05

		超自我因子					
		E	I	E＋I	E－E	I－I	(M－A)＋I
±1㎏ n＝29	平均%	3.9	5.5	9.6	12.4	8.8	34.8
	SD	3.2	3.6	4.8	6.4	4.2	8.3
	RANGE	0.0~13.0	0.0~13.0	0.0~21.0	0.0~27.0	0.0~19.0	21.0~52.0
－5㎏以上 n＝11	平均%	2.5	4.5	7.1	11.9	9.6	35.0
	SD	2.1	3.4	4.1	7.7	4.2	8.2
	RANGE	0.0~ 6.0	0.0~13.0	4.0~17.0	0.0~25.0	0.0~15.0	19.0~46.0
F		0.44	0.94	0.79	1.51	1.05	1.03
＋5㎏以上 n＝18	平均%	1.7	4.1	5.9	13.2	10.7	34.0
	SD	2.0	3.5	4.7	7.6	5.0	8.8
	RANGE	0.0~ 6.0	0.0~10.0	0.0~13.0	0.0~23.0	4.0~23.0	17.0~50.0
F		0.39	0.96	1.00	1.44	1.44	1.13
		＊		＊			

人から非難，叱責，詰問を受けた際に攻撃的に否認すること（E）や一応悪いと思いながら

も言い訳すること（I）は，ある程度社会に適応するために必要なことである。E＋Iは精神発達，社会性の発達と密接な関係を持ち，あまり低値だと自我を主張し自分を積極的に守れない[4]。1年間で体重が5㎏以上増加した群は，±1㎏以内群よりも人から非難，叱責，詰問を受けた際に攻撃的に否認したり言い訳をしたりすることが少なく，自我が傷付けられやすいのではないかと思われる。

(4) 場面別評点因子出現率

P-F Studyの24の各場面の評点因子出現率を算出し，出現率の高かった上位2つを取り出して，体重変動±1㎏以内群，－5㎏以上群及び＋5㎏以上群を比較したところ，24場面中5つの場面で－5㎏以上群の1位の評点因子が他の二群と異なっていた。

超自我阻害場面では，場面5（新品の時計がすぐに止まってしまうことを言いにきている場面）で，±1㎏以内群と－5㎏以上群の1位と2位が入れ代わっており，－5㎏以上群ではI（自己非難）が，±1㎏以内群ではi（自分の努力での問題解決）が1位となっていた。＋5㎏以上群は，Iとiの両方が1位であった。場面10（「おまえは嘘つきだ!!」と非難されている場面）では，±1㎏以内群と＋5㎏以上群は，E（人や物に対する直接的な敵意を示す反応）が1位で，－5㎏以上群は，I′（失望や不満をあえて表明しない）が1位だった。

自我阻害場面は，場面6（図書館の規則で，本の貸出は2冊しかできないと言われている場面）と場面14（待ち合わせ時間を10分過ぎても相手がまだ来ない場面），場面20（自分たちだけ誘われなかった場面）で，±1㎏以内群と＋5㎏以上群は，E′（失望や不満を表出する反応）が1位になっていたが，－5㎏以上群は場面6でiとm（忍耐し規則や習慣に従う反応）が1位，場面14ではM（誰にも罪はない）とmが1位，場面20ではIが1位となっていた。

このように反応評点因子の異なった5つの場面を反応評点カテゴリー別にみると，－5㎏以上群はI－A（自責的）が4場面，他の群はE－A（他責的）が4場面であった。これは前述の，－5㎏以上群が±1㎏以内群に比べ，欲求不満の原因を自分の責任に帰す自責傾向が強いことに影響している。

また上記5場面のうち，GCR設定場面[9]が2カ所含まれていた（場面5・場面14）が，－5㎏以上群の反応評点因子がGCR評点因子と異なったのは場面14だけであった。したがって，－5㎏以上群のGCRの低値とこれらの場面とはあまり関連がないといえよう。

(5) 反応転移の方向と出現率

表5は，体重変動±1㎏以内群と，－5㎏以上群及び＋5㎏以上群の反応転移の方向と出現率を示したものである。（この表で←は，該当する評点因子や評点カテゴリーが，前半に多く出ることを示し，→は，それぞれ後半に多く出ることを示している。）

ここでは，テストに関する心構え，被験者の心理構造（どんな気持ちを秘めているか）が吟

味できる。

評点因子についてみると，体重変動－５kg以上群は±１kg以内群に比べて後半場面でＥ→が危険率１％で有意であった。評点カテゴリーでは，－５kg以上群は±１kg以内群に比べて後半場面でＯ－Ｄ→が危険率１％で有意であり，＋５kg以上群は前半場面で←Ｅ－Ａが±１kg以内よりも危険率５％で有意であった。

表５　反応転移の方向と出現率（±１kgと±５kg）

＊　：P＜0.05
＊＊　：P＜0.01

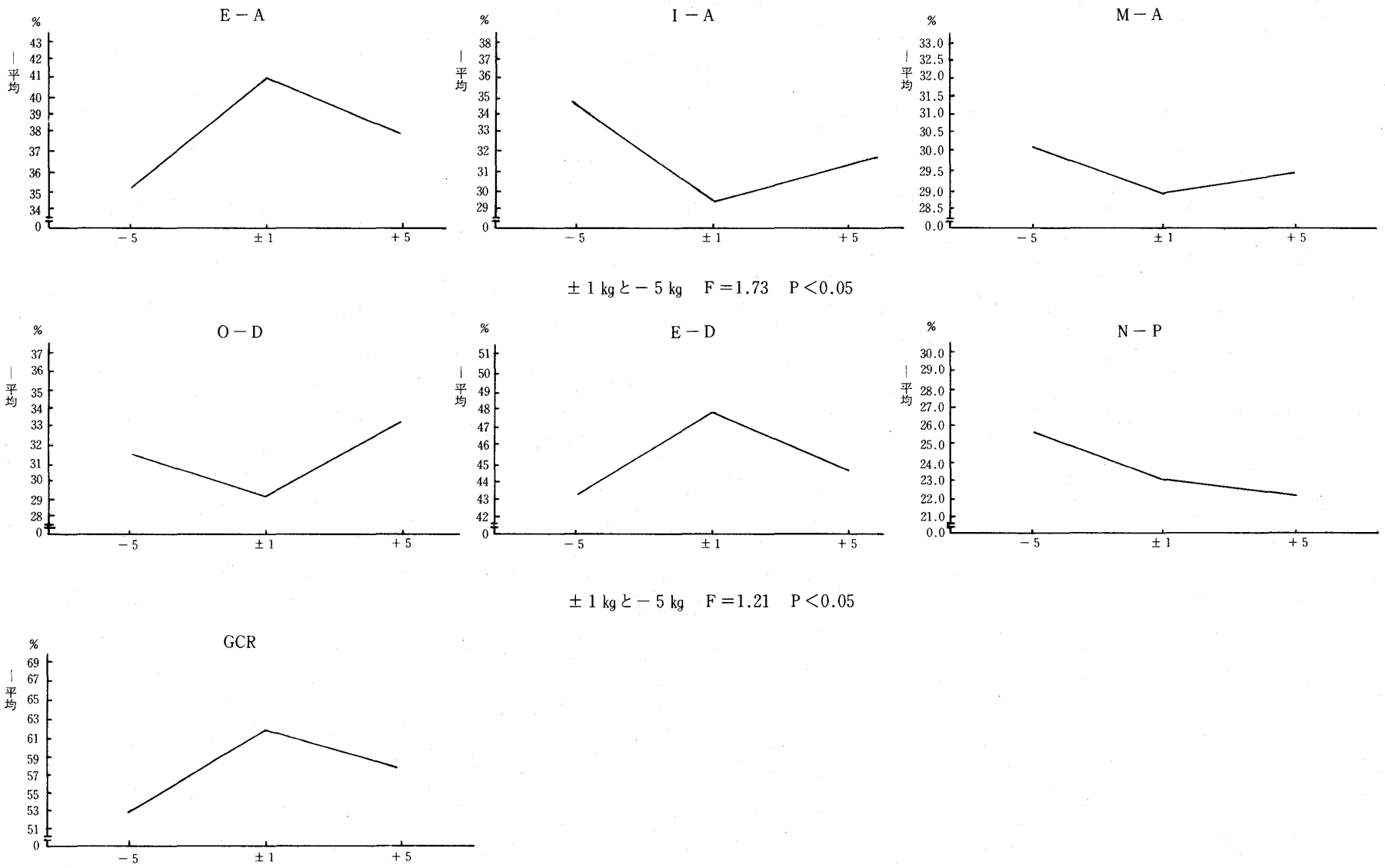
		評点因子									評点カテゴリー					
		E′	E	e	I′	I	i	M′	M	m	E-A	I-A	M-A	O-D	E-D	N-P
±１kg	←	10.3	27.6	13.8	0.0	3.4	13.8	0.0	10.3	0.0	20.7	0.0	0.0	3.4	0.0	17.2
n=29	→	20.7	3.4	0.0	10.3	27.6	3.4	0.0	10.3	24.1	0.0	11.1	17.2	13.8	0.0	0.0
－５kg以上	←	9.1	18.2	9.1	0.0	0.0	27.3	0.0	0.0	0.0	27.3	0.0	0.0	0.0	0.0	36.4
n＝11	→	9.1	18.2	0.0	9.1	45.5	9.1	0.0	9.1	18.2	9.1	18.2	27.3	45.5	18.2	0.0
			＊＊											＊＊		
＋５kg以上	←	11.1	11.1	11.1	11.1	11.1	16.7	5.6	0.0	0.0	0.0	5.6	5.6	0.0	5.6	11.1
											＊					
n＝18	→	27.8	11.1	0.0	0.0	22.2	0.0	0.0	5.6	22.2	5.6	5.6	5.6	11.1	0.0	16.7

すなわち，体重変動－５kg以上群は±１kg以内群に比べて，検査の後半で人や物に対する直接的な敵意を示す反応と自我の活動反応の表明を避ける反応の出現率が高く，＋５kg以上群は±１kg以内群に比べて検査の前半に，欲求不満の原因を他人や環境のせいにする反応の出現率が低かった。

また，－５kg以上群と＋５kg以上群の反応転移の方向と出現率を比較すると，検査の前半では－５kg以上群は＋５kg以上群より欲求不満の原因を他人や環境のせいにする反応(←Ｅ－Ａ)と，要求に固執した反応（←Ｎ－Ｐ）の出現率が危険率５％で大きく，検査の後半では，自我の活動反応の表明を避ける反応（Ｏ－Ｄ→）の出現率が危険率５％で大きかった。

４．ま と め

１年間の体重変動が大きいものの心理的特性を明らかにするために，本学女子短大生の1992年度２年次生58名を対象にP-F Study（青年用）を実施し，体重変動別に検討した結果，以下

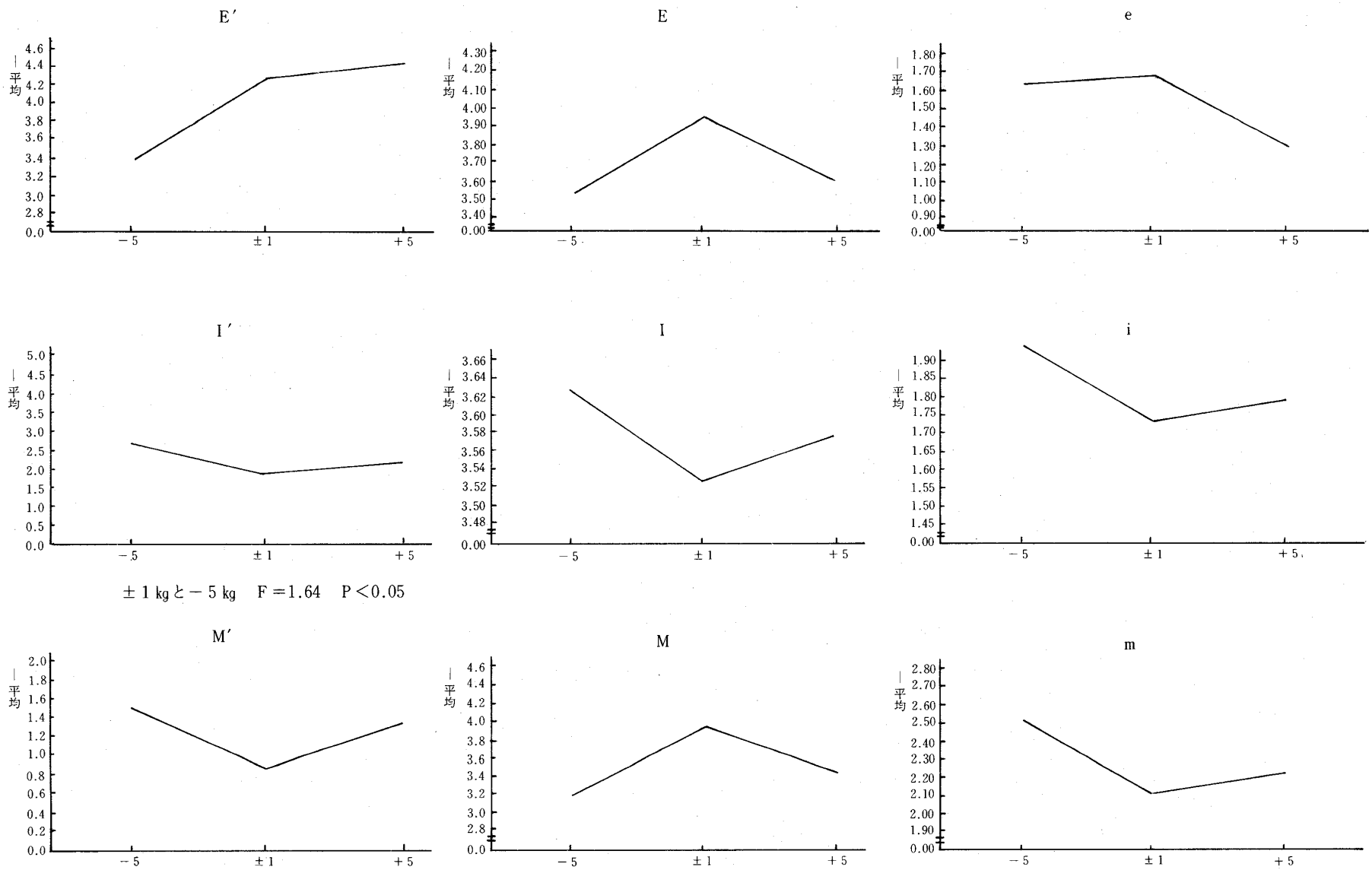


±1 kgと－5 kg　F＝1.73　P＜0.05

±1 kgと－5 kg　F＝1.21　P＜0.05

±1 kgと－5 kg　F＝1.51　P＜0.05

図1　体重変動別反応評点カテゴリー



±1 kgと−5 kg　F＝1.64　P＜0.05

±1 kgと−5 kg　F＝2.81　P＜0.05
±1 kgと＋5 kg　F＝1.22　P＜0.05

図2　体重変動別反応評点因子

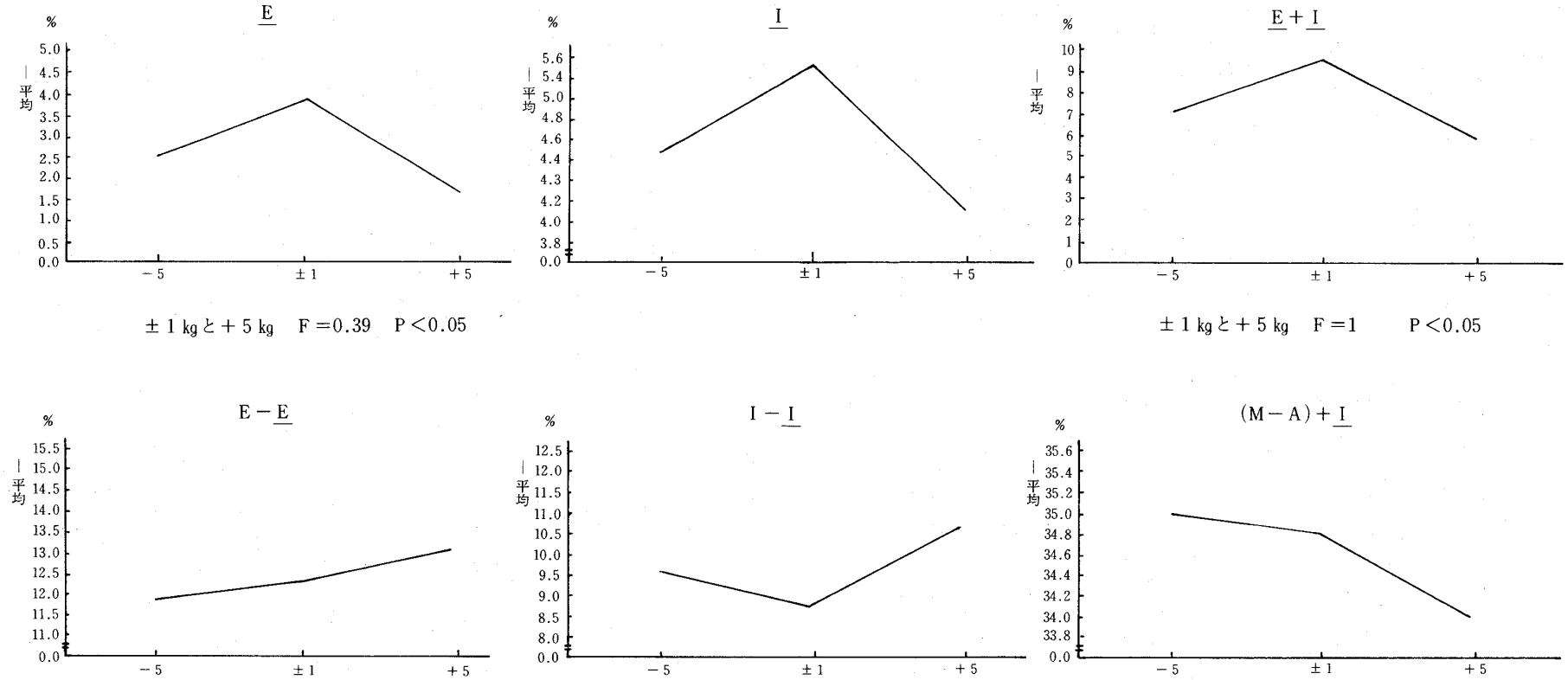


図3　体重変動別超自我因子

のような知見を得た。

(1) 体重変動－5㎏以上群は±1㎏以内群に比べて，I－A（欲求不満の原因を自分に帰す反応）が高く，E－D（ストレス解消のために率直に反応する）が低かった。また，GCR（集団順応度）も52.8％と低く，日常遭遇しやすい欲求不満場面では，常識的な適応の反応が少ないといえる。(図1)

(2) 体重変動－5㎏以上群の反応評点カテゴリー別にみた結果は，アノレキシアの性格や前段階のものの特性に類似した内容が示された。

(3) 反応評点因子別にみると，体重変動－5㎏以上群は，±1㎏以内群に比べてI′（失望や不満をあえて表明しない）とM′（不満の表明を最小限にする反応）が多かった。またM′は，＋5㎏以上群も±1㎏以内群に比べて多かった。(図2)

(4) 超自我因子別にみると，体重変動＋5㎏以上群は±1㎏以内群に比べて，E（攻撃的に否認する反応）とE＋I（攻撃的に否認する反応と言い訳の反応）が少なかった。(図3)

(5) 場面別評点因子を体重変動別にみたところ，体重変動－5㎏以上群は5つの場面で±1㎏以内群および＋5㎏以上群と異なった評点因子となった。

(6) 反応転移の方向と出現率では，体重変動－5㎏以上群は±1㎏以内群に比べて，検査の後半で人や物に対する直接的な敵意を示す反応（E）と自我の活動反応の表明を避ける反応（O－D）の出現率が高く，＋5㎏以上群は±1㎏以内群に比べて検査の前半に，欲求不満の原因を他人や環境のせいにする反応（E－A）の出現率が低かった。

注1）体型を分類する方法はいろいろあるが，BMIは，体脂肪率（体に占める脂肪の割合）との相関が高いと言われている。

BMIの算出方法は，体重（㎏）÷身長（㎝）^{2}×10^4である。

日本肥満学会が1992年に提唱した分類は，BMI 22を標準体重とし，20未満が痩せ，20以上24未満が普通，24以上26.5未満がやや肥満，26.5以上は肥満である。

参考文献

1）岡部祥平：摂食障害，性格心理学新講座第3巻，適応と不適応，金子書房，227－241，1989

2）渡辺久子：摂食障害－肥満とやせ－，新・医療心理学読本，からだの科学増刊10，日本評論社，176－179，1989

3）高橋三郎（訳）：DSM-III-R 精神障害の診断・統計マニュアル，医学書院，1990

4）大沢仲昭：やせの見分け方，現代のエスプリ　197－食・性・こころ－，至文堂，61－73，1983.

5）矢内原巧，木村武彦，中山徹也：女性のやせ，やせ（臨床症状シリーズ14），178－195，1981.

6）林　勝造，一谷　彊，中田義朗，秦　一士，津田浩一，西尾　博，西川　満：PFスタディ解説，三京房，1987

7）一谷　彊，林　勝造，中田義朗，秦　一士，津田浩一，西尾　博，西川　満：P-F Study（青年用）

標準化の研究（Ⅰ）序論－Rosenzweigによる「青年における欲求不満反応の性差」について－，京都教育大学紀要，Ser. A. 66，1－4，1985
8）アーサー・H・クリスプ，高木隆郎，石坂好樹（訳）：思春期やせ症の世界，98－104，紀伊國屋書店，1991
9）一谷　彊，林　勝造，中田義朗，秦　一士，津田浩一，西尾　博，西川　満：P-F Study（青年用）標準化の研究（Ⅲ）標準化のために－中学生・高校生・大学生について－，京都教育大学紀要，Ser. A. 68，1－11，1985
10）斎藤　学：家族依存症－仕事中毒から過食まで－，誠信書房，1992

［P-F Studyとは］

P-F Studyは，24の漫画風の絵場面からなる準投影法（semi-projective device）で，日常普通にだれもが経験する社会的欲求不満場面から構成されている。絵は線画で，各場面とも二人の人物が描かれているが，人の表情や態度は極力省略されており，左側の人物が欲求不満を起こさせる若しくは，既に存在している欲求不満を指摘する様子が描かれている。（図4）

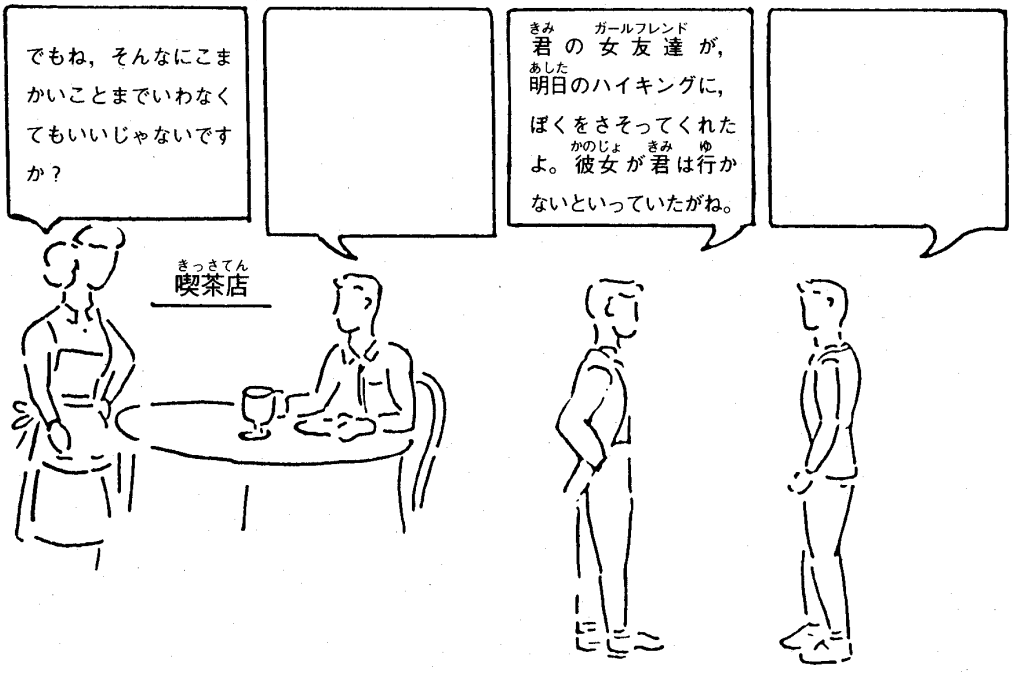


図4　P-F Study（青年用）の一例

被験者は，それぞれの場面を見て，左側の人の言葉を受けて右側の人物がどんな反応をするか連想し，一番最初に心に浮かんだ反応を空白部に書き入れるように教示される。反応は，アグレッションの方向とアグレッションの型，それぞれ3種，計9つのカテゴリーにあわせて，9種の評点因子を用いて記号化されるようになっている。（表6）

アグレッションが，方向的に外界（out）に向けられるか，内界（in）に向けられるか，方向性から離れたり（off），方向性を持たなかったりすることから3つに分けられ，邦訳では，

欲求不満をもたらした“責め”をどこに求めるかという視点から，それぞれ他責的（Extraggression），自責的（Intraggression），無責的（Imaggression）と表現されている。またアグレッションは，敵意（Hostility）のみを含むのではなく，自己主張性（Self-Assertiveness）や企図（Enterprise）などを包括する。

表6　評点因子一覧表

アグレッションの型 ＼ アグレッションの方向		障害優位型（O－D）(Obstacle-Dominance)	自我防衛型（E－D）(Ego-Defense)（Etho-Defense）	要求固執型（N－P）(Need-Persistence)
他責的 (Extraggression)	E－A	E′(他責逡巡反応) (Extrapeditive) 欲求不満を起こさせた障害の指摘の強調にとどめる反応。 「チェ！」「なんだつまらない！」といった欲求不満をきたしたことの失望や表明もこの反応語に含まれる。	E (他罰反応) (Extrapunitive) とがめ，敵意などが環境の中の人や物に直接向けられる反応。 E：これはE反応の変型であって，負わされた責めに対して，自分には責任がないと否認する反応。	e (他責固執反応) (Extrapersistive) 欲求不満の解決をはかるために他の人が何らかの行動をしてくれることを強く期待する反応。
自責的 (Intraggression)	I－A	I′(自責逡巡反応) (Intropeditive) 欲求不満を起こさせた障害の指摘は内にとどめる反応。 多くの場合失望を外にあらわさず不満を抑えて表明しない。内にこもる形をとる。外からみると欲求不満の存在の否定と思われるような反応である。従って失望や不満を抱いていることを外にあらわさないためにかえって障害の存在が自分にとっては有益なものであるといった形の反応語もこれであるし，他の人に欲求不満をひき起させそのためにたいへん驚き当惑を示すような反応もこれに入る。	I (自罰反応) (Intropunitive) とがめや非難が自分自身に向けられ，自責・自己非難の形をとる反応。 I：これはI反応の変型であって，一応自分の罰は認めるが，避け得なかった環境に言及して本質的には失敗を認めない反応。多くの場合言い訳の形をとる。	i (自責固執反応) (Intropersistive) 欲求不満の解決をはかるために自分自ら努力をしたり，あるいは，罪償感から賠償とか罪滅ぼしを申出たりする反応。
無責的 (Imaggression)	M－A	M′(無責逡巡反応) (Impeditive) 欲求不満をひき起こさせた障害の指摘は最小限度にとどめられ，時には障害の存在を否定するような反応。	M (無罰反応) (Impunitive) 欲求不満をひき起したことに対する非難を全く回避し，ある時にはその場面は不可避的なものと見なして欲求不満を起させた人物を許す反応。	m (無責固執反応) (Impersistive) 時の経過とか，普通に予期される事態や環境が欲求不満の解決をもたらすだろうといった期待が表現される反応。忍耐するとか，規則習慣に従うとかの形をとることが特徴的である。

—PFスタディ解説1987年版より—

一方アグレッションの型は，障害優位（Obstacle-Dominance），自我防衛（Ego-Defense），要求固執（Need-Persistence）の3種である。障害優位（O－D）では，欲求不満を引き起こしている障害の存在の自覚を示すがそれ以上は進まず，悩んだり困惑しているかのようにみえる。外に向おうとしての足踏み状態，内に向おうとしての足踏み状態，方向性の無い足踏み状態の3つがあり，それぞれE′（Extrapeditive）「他責逡巡」，I′（Intropeditive）「自責逡巡」，M′（Impeditive）「無責逡巡」に対応する。自我防衛（E－D）では，被験者の自我の防御が優勢

となる。環境や自己に向けられるなんらかの形の敵意や，抑圧された形の恐怖，社会的受容を喪失することへの恐怖のようなものから，消極的あるいは破壊的な攻撃が見られることがある。E（Extrapunitive）の「他罰」，I（Intropunitiveh）の「自罰」，M（Impunitive）の「無罰」の3種に分類される。要求固執（N－P）では，被験者は，なんらかの積極的方法で障害を克服し，あるいは障害を迂回しようとするものである。つまり，障害のいかんにかかわらず目標に向かって固執しつづける。アグレッションの方向を加味されたe（Extrapersistive）「他責固執」と，i（Intropersistive）「自責固執」，m（Impersistive）「無責固執」の3種である。

以上アグレッションの3種の型と3種の方向の組み合わせによる9種の評点因子によって被験者の反応語を記述する。これらは過去約50年に渡っての，P-F Studyの臨床的，組織的発展によって補強され，欲求不満に関する実験的研究から逐次誘導されたものである。

P-F Studyの参考文献

1．林　勝造，一谷　彊，中田義朗，秦　一士，津田浩一，西尾　博，西川　満：PFスタディ解説，三京房，1987

2．一谷　彊，林　勝造，中田義朗，秦　一士，津田浩一，西尾　博，西川　満：P-F Study（青年用）標準化の研究（Ⅰ）序論－Rosenzweigによる「青年における欲求不満反応の性差」について－，京都教育大学紀要，Ser. A. 66，1－4，1985

3．一谷　彊，林　勝造，中田義朗，秦　一士，津田浩一，西尾　博，西川　満：P-F Study（青年用）標準化の研究（Ⅱ）予備的研究－中Ⅱ・高Ⅱ・大Ⅱの生徒・学生を中心に－，京都教育大学紀要，Ser. A. 67，31－35，1985

4．一谷　彊，林　勝造，中田義朗，秦　一士，津田浩一，西尾　博，西川　満：P-F Study（青年用）標準化の研究（Ⅲ）標準化のために－中学生・高校生・大学生について－，京都教育大学紀要，Ser. A. 68，1－11，1985